

快樂に抗えない人妻が
巨根整体師と流されセックス
してしまおう



裕也が鹿島整体院に通うのも今日で五回目となる。

最初はポストに入っていたチラシを見てなんとなく来てみただけだったが、施術後のすっきりとした感覚が忘れられず、気付いたらその場で次の予約を入れていたのだ。

今まで整体にかからなかったことを後悔するくらいには、素晴らしい経験だった。

以来、裕也は定期的にここで身体を整えてもらっている。

「こちらへどうぞ」

整体師の鹿島は、裕也とさほど歳の変わらない優しげな面立ちの男だった。

しかしその身体は白衣の上からでもわかるほどガッチリと逞しい。整体師という仕事柄なのか、二の腕から前腕にかけては特に発達した筋肉に覆

われていた。

その太い腕で身体の歪みを矯正されるのが、たまらなく気持ちいいのだ。いつも通りうつ伏せの体勢で寝そべった裕也は、凝り固まった肩甲骨を解される心地よさにほっと息を吐いた。

次の瞬間だった。

「えっ……？」

下着ごとスウェットパンツを下げられ、尻の狭間に鹿島の指が潜り込ん
でくる。

裕也が事態を理解するより早く、指先は秘められた窄まりを探り当て、
ぬぷうっと侵入を果たした。

「あっ♡ちよっ、だめ……っ♡」

あらかじめ何か塗られていたのか、指は驚くほどスムーズに行き来する。

すぐにもう一本が挿じ込まれ、苦しいと言う間もなく的確に前立腺を探り当てられた。

「はぁンッ……♡」

まだ目立たないそこをトントンと押されて、自然と腰が上がってしまう。鹿島はきゆうっと締まる穴にローションを垂らすと、指の動きをより大胆なものにした。

腹側をこするように大きく抜き差しを繰り返し、時折膨らみを押し込んだままブルブルと振動を加える。

二本の指で巧みに前立腺を責められ、裕也はあっという間に達してしまった。

「だめっ♡いくぅ……っ♡♡♡」

くんと上向いた白尻が緊張し、震えて弛緩する。

爪の先まで染み渡るメスイキの快感に、裕也は甘く息を荒げた。

「はあっ♡はあっ……♡鹿島さん、どうしてこんなこと……あっ♡あっ♡」

返答の代わりにねっとり中を掻き回され、言葉が途切れた。

「ふうっ……♡うく……っ♡」

ぬちよ、ぬちよ、とわざといやらしい水音を立てながら、イキたての粘膜をなおも弄られる。

今度は前立腺だけでなく縁や襞にも指が這わされ、焦らし交じりの触れ方に裕也の身体はいつそう熱を帯びた。

「あ……っ♡あ♡あ……♡んうんッ……♡」

既にメスイキを経た肉体は、貪欲に快楽を受け取って昇り詰めてしまう。

（い、いきそお……っ♡♡）

背筋に力が入り、髀がぎゅうつと狭くなる。

しかし、あともう少しというタイミングで、鹿島は指を引き抜いた。

「ああ……っ♡」

絶頂寸前で放り出された身体が、虚しく痙攣する。

「なんで……っ♡」

切なく眉を寄せる裕也の面前で、鹿島は張り詰めた白衣の前を解放した。ズボンを下げるやいなや、腹を打つ勢いで巨大な男根が飛び出してくる。

「ひっ……♡」

それは裕也が今まで目にしたことがないほど凶悪で猛々しい欲望だった。血管の目立つ赤黒い竿と重たげにぶら下がる陰囊。

でっぷりとした亀頭には既にカウパーが浮き、今にも滴り落ちそうだ。

「ほら、奥さん。コイツが欲しいんでしょう？」

ペニスの根元を持って、鹿島が雄の威容を見せつけてくる。

「だ、ダメ……♡」

拒絶の言葉を口にしながらも、裕也の視線は目の前の巨根に釘付けだった。

夫である彰介のものよりも一回り太くて長い、カリが発達したズル剥けのペニス。

この逞しい雄で貫かれたら——そう思うと、裕也の身体は芯まできゅうんと痺れた。

「はあ……っ……♡」

アナルがヒクヒクと反応し、じゅわっと唾液が滲み出す。

ダメ……ダメなのに……。

メスの本能に身体が引き摺られていく。